

「淳、まだ夏休みの予定は決まっていって言ったよな？」

「うん、まだ決まっていけないけど」

「よし、じゃあ山籠りにいくぞ」

「え、え？」

夏休みまであとわずか一週間に迫ろうとしていた日。ようやくテストが終わり、ほっと一息ついた日の帰り道。雄二はとんでもないことを提案してきた。

確かに、淳も雄二も部活には入っていなかったため、夏休みの予定はまだない。しいて言えば、お盆休みに家族旅行に行くくらいはあるが、それ以外はまったくない。だが、いきなり雄二がそんな無茶な提案をしてきたため、淳はまるっきり理解ができなかった。

しかし、この突拍子もない提案にもあるわけがあった。雄二が見るに、淳の様子が以前からおかしかったからだ。出会う間もない慎は全く気がつかなかったが、しかし長年の中である雄二にはその異変に気がついていて、いつもの修行の

とき、淳は修行に身が入っていないような気配を雄二は察知したのだ。何時からそうなっていたかまでは雄二は気がついていなかったが、しかしあたりはついていて。そう、あのパイに襲われたときだ。パイに襲われた後、きっちり説教をもらい、謹慎処分を受け、修行を再開したのは一週間後だった。そのときすぐに雄二は気がついたわけではなかったが、しかしそれ以外に要因が思いつかない雄二はあの事件のせいだと断定した。そこで、雄二は淳をどうにかしてやりたいと思い、その方法として山籠りを提案したのだった。

「テレビとか映画とかマンガとか。よくあるだろ、短期的に強くなるために山籠りするって。お前も俺も強くなりたい。だったら男は黙って山籠りだ！」

「で、でも危なくない？」

「大丈夫だって。ちゃんと食べられる薬草図鑑とか持っていけば。俺がいれば火は何とかなるから肉や魚はやける。それなら食べ物の心配は要らないだろ。俺たちはキャンプの経験あるし、しっかりと準備もしていく。動物たちは火をたいておけば近寄ってこないし」

「で、でも、僕たち二人だけ出って言うのは……」

「おいおい、何事も経験だろ。うーん。そうだ！　じゃあ、慎先生がオーケーって言ったら決行っていうのはどうだ？」

「えっと……。うん、まあ慎先生が良いって言ったなら、大丈夫かな」

「よし、じゃあ決まり。早速戻って聞いてみよう」

「山籠り？　いや、危ないだろ」

学校に戻ってきた淳たちの話しを慎は教室で聞いた。テストが終わったばかりだから、その採点があるために職員室では話せない。もとより能力の話であるため、職員室で話すようなことではなかったのだ。教室となった。

「あーぶなくないっすよ。俺たち能力者っすよ。そこらへんの熊一匹、吹き飛ばせますっつて。それに山籠りっていつでもそんなたいそうな山いくわけじゃないっすよ。電車で二時間圏内のところにいくつもりっす。狸は出ても、くまはでないっすよ」

「いやいやいや。確かに熊は大丈夫でも、毒をもった虫とかはどうするんだ？」

「そこらへんもしっかり対策していくつすよ。それに俺たち、何度もキャンプで山に泊まったことあるんすよ」

「そうなのか、淳？」

「はい。小学校のころに、学校企画のキャンプによく雄二と参加したんです。カレー作ったり、テント張ったり」

「へえ、そうか。でもさすがに二人だけでいかせるのはなあ」

「いいんじゃないかな、山籠り」

突然、二条が話にわって入ってきた。淳たちはその気配に気がついていなかったもので、思わず大きなリアクションでそちらに振り向いた。

「お前、気配を殺してくるなよ」

「ゴメンゴメン。それより、雄二君、山後もしるんだって？」

「そうなんすよ。でも、慎先生許してくれなくて」

「だって危ないだろ」

「大丈夫だと思うよ。僕も彼らくらいするとき、やったことあ

るから」

「え？ マジか！」

先ほど二条が入ってきたときとは比べ物にならないくらい、大きく慎は驚く。二条は慎に「うん」と返答しながら続けた。

「いつだよ、いつ！ おれ、そんなこと全然知らなかったぞ」

「ほら、秋頃のあの後、さ」

「あのって、あれか」

「うん」

「ああ。そう、か」

一瞬、二人は神妙な顔持ちになる。しかしすぐに二条は切り替えて「僕一人でも何とかなったんだし、彼ら二人なら大丈夫だと思うけど」と述べた。

「でも、そのときのお前の強さとかいつらの強さとかじゃ全然違うじゃないか」

「まあね。でも、僕が行ったところなら、全然危なくなかったよ。人目も全くなかったから能力の特訓にもうってつけだ  
と思う」

「ううん、でもさすがになあ」

「その代わり二人とも、約束して」

二条は慎のことを無視して淳たちに話しかける。「おい、勝手に話を進めんな」と慎は言ってきたが、二条はかまわずに二人に「危ないことはなし。もし、蛇にかまれたり、変な虫に刺されたらすぐに病院に行くこと。他にも、キャンプの鉄則を守って安全には気をつけること。守らなきゃいけないマニュアルを僕が作ってきてあげるから、それを絶対に守ること。できるね」と告げた。

淳は二条に「はい」とうなずき、雄二は「分かっていますよ!」と調子よく答えた。

「よし、じゃあ良いよ。たまに僕も顔を見せにいくからね。それと携帯電話は絶対に持っていくこと。もしものことがあったら、すぐに僕や慎君に連絡すること。いいね?」

「おい、勝手に決めんな」

「よし、じゃあ今日は解散」

「おい、おい」

二条は慎の手を引き、二人にバイバイと手を振りながら教

室を出て行った。

「いい、のかな」

淳は雄二につぶやく。

「いいんじゃねえか」

うーんと唸りすこし悩むそぶりを見せ、雄二もどこか不安げにそう答えた。

そして夏休みに入り、山籠り当日。二人ともお盆には家族旅行に行くことになっていたので、山籠りは夏休みに入ってから3週間行われることになった。

親には学校行事とあってあり、二条から連絡が行っていた。

「雄二、忘れ物はない？」

どでかいリュックを背負い、雄二は右手でグッドポーズを作り、「おう、大丈夫だぜ」と答える。

最初、雄二は徒歩で行こうといていたが、しかしはじめの前から疲れてしまっただけで修行ができないと淳は却下した。だが山籠り中は風呂に入れないこともあり、においがひどく

なりそうというだと理由で、帰りは徒歩で帰ることになった。

二人が山籠りをしてから3日がたった。最初は二人とも能力の練習を集中的にできていたが、しかし1日たった後からいつきにきつくなり始めた。理由は簡単だ。空腹である。水は渾の能力を使い、川の水をいったん水蒸気にしてやれば、簡単に手に入れることができた。また、二条にもらったマニユアルから、植物の摂取は難しくはなかった。

しかしタンパク源を得ることができなかつたのだ。もちろん、都会っこである彼らが狩った獲物を殺して食べるということをするのができるかという問題もあったが、しかしそれ以前の問題であった。食べてもいい動物や魚のリストも二条からもらってはいたが、手に入れることができなかったのだ。

動物というものは植物と違って逃げるものである。こちらが能力を使って攻撃してもうまくかわされてしまう。それも人間とは比べ物にはならないくらいの速さと瞬発力で。そも

そも二人は能力を避ける相手との対戦経験がほとんどなかった。だから、不規則に動く的に、倒すほどの威力を持って当てることは難しかったのだ。たしかに慎との修行で動く的を狙って能力を使う練習はしていたが、しかしその的は規則的な運動しかしていなかったから、このように動く相手に能力を当てることができなかつたのだ。

加えて二人はおなががすいてから食事の心配をし始めた。つまり、能力の修行をして、疲労してから狩に出かけたのだ。そんな二人が、獲物を狩ることができないのは必然ともいえた。

「ああ、腹減つたな。肉くいてえ」

「雄二、そろそろやばいと思うんだけど……」

二条のマニユアルには、安全のために少しでも危険だと思つたらすぐに帰つてくることとあつた。特に空腹はやばい状態で放っておくと完全に動けなくなる可能性があるから、なるべく早く対処をしろと書いてあり、実際に出発する前にも念を押された。

「でもよお、ここであきらめたら……」

「いったん帰って、それでまた来よう」

淳はおろか雄二も折れかかっていた。それほど、空腹というものは二人にとって大きなダメージを与えていた。

そしてついに雄二が「そうだな。いったん帰るか」と言おうとしたその瞬間、「ほう、ずいぶんと面白い先客がいたものだ」と二人は語りかけられた。

こんな山の中に誰もいないと思っていた二人はものすごく驚き、びくりとそちらに振り向く。そしてそこに立っていたのは、あの気高き純白、淳たちが始めて戦った組織の長、白藤聡介であった。